産経新聞

平成30年(2018)日刊27138号
7|23[月] 大暑
産業経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN
発行所 ©産業経済新聞東京本社2018
〒100－8077東京都千代田区大手町1-7-2
☎東京(03)3231-7111(大代表)

歴史の交差点

武蔵野大特任教授 山内昌之

中東 手腕異なる独裁者

トルコのエルドアン大統領は、6月に52%の高得票率で再選された。2023年までの任期である。同氏は、イランのハメネイ最高指導者とともに中東屈指の独裁者となるという観測が欧米あたりから上がっている。しかし、投票用紙の不正処理などがあったとしても、エルドアン氏は少なくとも選挙民の32%に強固な支持基盤を持っている。そのうえ、最大都市イスタンブール市長や首相など政治家として30年間のキャリアを誇り、15年間は事実上の国政トップの地位にあった。市長として都市インフラが破綻寸前の街を、欧亜にまたがるメガロポリスとして蘇生させた実績や、トルコをG20有数の経済強国に育てた首相としての手腕は、ハメネイ師にはないものだ。

もし、イスラム革命の指導者、ホメイニ師がハメネイ師を後継者に指名しなければ、ほとんどのイラン人はその名を知ることもなかっただろう。そのホメイニ師も、フランスなど海外亡命中にシャー(国王)の王朝下で選挙が行われていたとしても、彼に投票するイラン人は5%から10%程度にとどまったという分析もある。

この見方によれば、ホメイニ師は、シャーが権力を放棄して軍が中立を宣言するなか、街中に放り出された宝石箱を進んで拾い上げたにすぎない。軍を含めて、どの既成政党も左翼組織も宝石箱を奪わなかっただけだ(アミール・ターヘリー『アッシャルクル・アウサト』6月29日)。

ホメイニ師は、イスラム主義者からマオイスト(毛派)、イスラム・マルクス主義者に至るまですべての潮流の語彙や運動形態を吸収した特異な宗教権威主義者であった。革命は人びとに財産を与えるためでなく、シーア派の大義のために殉教を促すものなのである。外国との戦争で死亡したイラン人は100万人以上に達したのに、エルドアン氏がクルディスタン労働者党との戦いやシリア内戦への介入でトルコ人に強いた犠牲は数千人にとどまっている。

エルドアン氏は地方都市と農村部に利益再配分を図るポピュリズムとリアリズムの徒ではあるが、革命を奇貨として親族や支持者に堂々と国家財産を分配したシーア派宗教者ほどの大胆な政治的シュールレアリスムには徹しきれていない。イランからトルコへ亡命するか避難する人口が150万人にもなるのに、トルコからイランに出国するトルコ人は一人もいないのは、どこの世界でも基本的に「自由」の理解に格別の理屈を必要としないことを意味する。

それにしても、大統領や国会議員への立候補資格を審査するイランと違って、多党制政治と各種立候補の自由を認めるトルコでは、大統領と国会内多数派との間にねじれも起きかねないほど、中東では珍しく民主主義の試行や実験が行われてきた。これと比べるなら、アラブの春の陣痛に耐えながら、旧体制の復活やその亜種の創成を導いただけのアラブ人にとって、トルコとイランの存在感はひときわ眩しいのではないだろうか。

(やまうち まさゆき)